

研究

横川先生と佐伯 (十二)

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

今回は、郷土のくらしについて紹介いたします。

郷土のくらし 横川末吉著「郷土の研究」より

い、山村のくらし

明治村（は張生所）の長畑から、椿山（六五九〇）の八合目をまわって、中野村（本正村）に出ることが出来ます。少し山を下ると、風戸の集落が、南向きの山腹になごやかに並んでいます。こんな意外に思ふ山中の部落は、因尾（本正村）に行くとたくさんあります。

釜尾、平原、元山部、片内、樫峯、上腰越などをあけることができます。

急な山腹に、わりあい立てこんだ家は、たいてい草ぶきです。

原野の利用の所で説明したように、共同で草刈場を管理し、リへばなかやで順々にふきかえています。

厚い屋根にこけがはえています。ひさしのあるものもないのもあります。何となく、落ちつきのある住居です。

土地から草木がはえているように、家そのものは、はえたのではないかと思うほどです。

草が多いので、黒牛がたいてい一、二匹、うまやで藩かに反芻しています。せどには、きれいな水が、竹を割ったといを通って、絶え間なく流れこんでいます。

裏の山は、しぜんの防風林ですし、すぐの水立の間には、しいたけのぼたき立ててあります。こんな所の香り高いしいたけのお汁は、大へんおいしいごちそうです。

同じような山間の部落は、小野市村（宇目所）でも、除、真内、血内、松島屋、栗所内、真弓などがありません。

ここでは、もう一つ別の楽しいものがあります。はちみつです。深山の人跡まれな所では、よくみつばちが棲んでいます。巧者な人は、この珍らしい山のさちを、木の株のうへろになった所で見つけます。普通に十月のみつといわれる時が、一番よいそうです。運がよいと、一つの巣で四升も、みつがとれるそうです。焼いたおもちにつけたはちみつのはちみつは、忘れられないものの一つです。

高い山腹の村から谷に降りると、夏は、あかやえのはちみつ、それらを取ることは、食糧となる以外に、山の楽しいスポーツでもありましよう。

およそ、これらの部落は、今の道路よりも、ずっと上に並んでいます。昔の山地は屋根づたいに村から村へと通じていました。これが、いとしし狩りにも利用されましよう。

真弓では、一年に十頭以上のいとししをとると聞きました。

春の新芽の出るころは、おらびやせんまいが、焼き

はらった原野に、一雨ごとに伸び上がります。せんまの綿毛を、家族そろって、夜のふけるまでかかってとります。これらの乾燥したものは、たくわえて食料とし、長い間、家計を助けます。

しかし、私の調べた所では、因尾村では、山の部落は、戸数がみな減っていました。

屋形（本庄村）では三戸が一戸になり、川原内では二戸が、今にも一戸になろうとしています。

小野市では、因尾のように減ってはいませんが、全然増してはいません。楽しい山の生活が、どうして戸数の減少を起すのでしょいか。

これについて考えて見ましよう。

脊板を肩うて登る険しい道、取給物を受けるためには、朝日四時から晩は暗くなるまでかかる道、学校へは山道を二里も通わねばならぬなど、これらは苦しい山の生活です。

先日、私は、木浦から真弓に帰る中学生と同行しました。木浦鉦山の後のかやと分けて登ると、鉦山の廃墟が、恐ろしい岩くずれを起していました。原始林の中には、次々に倒れた大木が横たわっています。

気の弱い都会の人は、これを見て、一度にもいってしまひそうです。しかし、自然とゆっくり味あうといふよりは、自然と一体となった村の人々は、黙って運命にまかせたように、ここを通っています。どの父兄の方に尋ねても、学校に通うのに大へん困ると話すのも、無理はありません。

急病の時などはどうなるでしょうか。近代的な医療の恩恵を受けずに終らねばなりません。たとえ無医村ではなくても、部落には、医師を呼べないことも多いようです。幸いに空気はよいし、生活は自然的であ

るので、病気は少ないようです。

このように、便利が悪いので、長男は別として、次男、三男が、それぞれ志を立てて、郷里を出るのも無理はないと思えます。

長い間にも、人口が増加しないのは、そのためではないかと思えます。すべては、交通の不便のためだと言えそうです。

因尾の方よりも、小野市の方がいくらか生活に活気があるのも、林道開墾の成功によるものであらうと、前に述べましたが、それを、ここでも繰り返したいと思えます。じつとしておれば、生活は豊かでも、動けばたちまち交通の大きな不便に妨げられるのが、山の生活でしょう。

二十数年前、横川先生はリユツクサツクを脊負って、弥生町の長畑から、本庄村の風戸へと、椿山を踏破しています。佐伯史談会員も、昭和四十六年新春初歩きとして、風戸方面からの椿山登山を試みています。その時の様子を高木嘉吉会長は、次のように綴っています。

「山上からの眺望は天下一品、絶佳の一語に尽きる。（中略）」

この道と、現在の番匠川沿いの県道とを比較した時、その昔、県道沿いに進もうとすれば、或は断崖にははまれ、或は水中を渡渉する等の困難に遭遇したであらう。

山の後線を交通路とすることによって、それらの困難をまぬかれ、更に展望のきく後線を通ることによって、一方、因尾、中野、上野方面、他方、明治、川登、府内方面を目ざす所に任意に降りて行けたことである。

こうした道は、昔の人の生活の知恵によって形成された貴重な遺跡である。

昔の街道は、段々湮滅してわからなくなりつつあるが、消滅しないうちに踏査して、確かめておきたいものである。――

と指摘されていますが、同感です。

横川先生も、たびたび因尾の里を訪れています。

当時の草ぶきの家、うまゆで反芻していた黒牛(和牛)は、現在、そのままの状態でしょうか。随分変化しているものと想像されます。そこには、農業の移り変わりが反映されていると思われまします。

「高い山腹の村から谷に降りると、夏はあゆやえのはもいます。それらを取ることは食糧となる以外に、山の楽しいスポーツでもありましよう」と、横川先生は語っています。ちかごろの番五川の上流は、どうなっているのでしょうか。

大分県下の各河川の「水消失」が話題にとりあげられるようになりました。

玖珠川も、ここ十年近く水が少なくなつて川底の石は露出し、川沿いの家では、地下水が枯れるなどの事態が起こつています。県下最大の大野川も、同じようなことが地元で問題にされつつあります。

本庄西小学校(旧因尾村)、重岡小学校(宇目町)にもプールが作られています。これも河川の水量減少の一つのおそれではないでしょうか。

子どもたちが、番五川で水遊びをしたり、魚を追うなどの場面も少なくなりつつあります。佐伯市、南海郡郡の子どもの水泳も、プールに頼っているのが現状です。

番五川は、かけがえのない、大切な財産です。この川を水量豊かな清流にするため、わたしたちは、今後、最

大の努力を傾注すべきです。

佐伯湾の海と番五川の水は、いつまでも、美しく、きれいであって欲しいものです。あゆやえのほのすむ川であることが、わたしたちの望みです。

本庄村

佐伯湾にそそぐ一級河川番五川の上流にあります。

町村合併促進法の施行により、昭和三十年六月一日、中野・因尾の両村が合併した村です。番五川の源であることにちなみ、本庄村と名づけられました。

北側には、佩楯山・石峠山・冠岳・椿山、南西には酒利岳が聳えています。

全面積一万二千haのうち、林野面積が九十四%を占めている山村です。

人口は、十年前、四千五百人ほどでしたが、過疎化の波によって、現在三千二百人余りとなりました。しかし、自然環境はすばらしく、まさに「山紫水明の地」です。

山野の佳景、溪谷の美、清流に釣りを楽しむなど、四季それぞれに織りなす山村特有の変化の美しさは、実に見事です。

特に、大正十一年、国の天然記念物に指定された小半(おながら)鍾乳洞は有名です。舗装された七百mの洞内の歩道、照明に輝く無数の白銀の炭剣、金柱、斜柱、湧橋、大シャンデリアなどは、まさに地下の宮殿といふことができるでしょう。

この鍾乳洞は「国鉄指定周遊地」に採択される見通しです。

村の産業は農林業が主体です。

林業には力をいれ、すでに第一次林業構造改善事業を終えて、さらに、昭和四十九年度から第二次林業構造改

善事業に着手し、林道の開設などに取り組んでいます。

また、森林開発公団、県造林公社などによる分収造林にも力を注ぎ、毎年二百ha前後の造林を行ない、林業生産の増大を図っています。

農業は、兼業農家が多く、米・葉タバコ・養蚕・畜産、茶・しいたけなどの生産に励んでいます。

とくに所得の向上を茶に求め、本正銘茶の特産地を目指して茶園造成を図り、昨年度は六百五十万円で投入して、四社の集団茶園造成事業を推進し、茶業振興に努めています。

宇目町

傾山系の鋭峰と、美林に囲まれた町は、その九割近くが山林です。

農林業が中心で、古くから盛んな椎茸栽培は主要産業の一つで、県下でも有数な生産高を誇っています。

林業によって、所得拡大を図るために、山林振興事業、林業構造改善事業、過疎対策事業などによる、第二次山村開発事業を積極的に押し進めています。

また、地下資源も豊富で、現在、三千二百ものエメリーが採掘されており、さらに、昭和四十六年度から行なわれた鉱物採鉱ボーリングで、品位の高い銅鉱床が発見され、その開発が望まれています。

町のいたるところに、深山、幽谷、諸溪流があり、なかでも藤河内溪谷は、宇目町を象徴する代表的な名勝地です。

溪谷は、一枚岩の花崗岩で敷きつめられ、なめらかな明るい岩床が続いています。岩床には大陥穴群がみられ、神秘さをも出ししています。

「あん子面みよ、目は猿まなこ。……………」

子守娘のつらさ、せつなさを歌った民謡「宇目の歌けんか」も有名です。

昭和三十七年に完成した北川ダム（人造湖）は、大分県の誇るアーチ式ダムで、県営北川発電として、産業活動の重要な役目を果たしています。

横川先生は、「木浦鉱山の後のかき」を分けて登ると、鉱山の廃墟が、恐ろしい岩くずれを起こしていました。」と述べています。

横川先生が指摘されてから二十三年後の昭和四十七年、大分県は通産省とタイアップして、県内の休廃止鉱山について、カドミウムや鉛などの有害重金属類のタレ流し、状況、しらみつぶしに総点検しています。

なかには、休廃止鉱山の所在すらはつきりしないものもあって、担当の県工鉱課では手を焼いています。調査が全部完了するのは、昭和五十年頃の見通しです。

県が分析して、「問題がある」と見られるものは、通産省に詳細を報告し、鉱業権者や排水管理義務者に対し、改善命令を出す仕組みになっています。

現在のとこ「通産省にデータを提出しなければならぬ」といっています。

木浦 鉱山

宇目町の中心部から西へ十五km、宮崎県の日之影町へ通じる道を登りつめたところが木浦鉱山です。あと三kmも行けば宮崎県ですが、道はまだ完全には通じていません。

ここは、かつてスズなどの採掘で大変にぎわったところでした。

鉱山のお祭りとして、たれかれとなく、顔にスミをぬりつける「スミつけ祭り」があって、めずらしい祭りと

して、話題を集めていました。

しかし、鉾山がおどろえると共に、「スミつけ祭り」も姿を消し、いま、鉾山は、舗装道路らしく黒い小石のエメリックの授振が行なわれています。

鉾山が盛んな頃は、児童数が二百人余りだった木浦小学校も、いまは、一年生三人、二年生六人、三年生六人、四年生六人、五年生七人、六年生九人、計三十九人になっています。

ここから八人離れたところに、一、二年生だけの西山分校があります。ここも一年生三人、二年生一人、計四人です。

本校・分校を合せて四十三人という小規模校です。

これも過疎現象の一つのあらわれといつてよいでしょう。

(つづく)

採録

前高 明神の神踊歌

本五村井ノ上の兩社秋祭奉納

会員 久々 宮 永

先達では態々お立寄り給わりましたので、不意で失礼しました。

当地の秋祭りも、ご贄の通りの寂れようです。再興、復活出来ないものかと思いますが、神踊りの「ハーインヤー」にしても、当部落(井ノ上)では奉仕する小生女生徒が、五十戸の部落中に僅か三名しか居ないようで、踊り子の数からして、單に一部落で

はどうにもならぬことで、淋しい限りであります。神踊りの歌詞については、ずっと以前に故老の口伝を書き残したものがありますので、それをご紹介しましょう。

四季

ハーインヤ 春は桜 ハレ その下に
ハーインヤ 夏は柳 ハレ その下に
ハーインヤ 秋は紅葉 ハレ その下に
ハーインヤ 冬は霰 ハレ その下に

十七八

イヨシ 十七八 その山 あの一つじ
ハーインヤ ハー 寝入るとすれはわり起こされる
ハー 寝入るとすれはわり起こされる
後世の武蔵野原の一本すすき

ハーインヤ ハー 何時穂に出来て乱れあうかな
ハー 何時穂に出来て乱れあうかな
夜中のべど逢はんその夜は悔やし
ハー 書きやる文をなだいたずらに
ハー みに見てやらん人ほうらめしや

塩飽

塩飽船がよ君待つらん

ハレ 風を静めて 名乗る君 (笛)

我は三原のサビ刀 思い廻せば 振ほしや
沖のとなかに茶屋建てて 上り下りの船を待つ
沖のかもめに物問へば 我は立つ鳥 波に問へ
船の上でも女郎は呼ぶ トマを数寝のかじまくら